1．　東田中学

昭和25年6月に朝鮮戦争が勃発し、日本経済は特需に沸き、昭和26年には自衛隊の前身である警察予備隊創設など日本に影響を与えたのだが、私には家庭環境の方に目が向き朝鮮戦争に関心なかったし、父が戦争によって儲けてくるわけでなし、我が家の経済状況には何も関係がなかった。

私は昭和25年4月に杉並第2小学校から区立東田中学校に入学した。私立中学に進学するものはあまりおらず、小学校からそのまま中学校に行ってクラス替えをやったという感じである。

中学校は専門科目にそれぞれの先生が教えることに新鮮味を覚え、特に理科の実験があり、楽しかった。でも小学校の延長で自宅で勉強習慣がない私には科目によって先生が代わることは学校だけでの吸収力に限界があり、結構負担であった。

従って1学期の成績は小学校より落ちており，「並」の成績で終わり。これが実力かもしれないと一向気にならなかった。

でも、転校の時、N先生「井田君、これからだったのにね。惜しいね。」と言って励ましてくれた言葉がとても嬉しく何故か印象に残っている。人は褒められるとやる気が出るものである。

1学期を終えた7月、突如、代々木に引っ越すことになり、私には寝耳に水で引っ越し理由は今もって知らない。

引っ越しは荷物を載せた馬力に載って五日市街道、青梅街道、甲州街道を経て代々木西参道まで行った。馬力は当時貴重な輸送手段で幹線道路を闊歩していた時代である。馬力の馬は、歩きながら街道上に糞をしていくことが許される時代だった。

2．代々木界隈

代々木の家の住所は東京都渋谷区代々木山谷町で、その後、番地改正になり、今は代々木4丁目である。

最寄り駅からの時間は小田急線参宮橋駅徒歩8分かJR代々木駅15分であり土佐の山内一豊を藩祖とする山内公爵の下屋敷の跡地の分譲地を購入したのである。分譲地の東側には明治神宮へ通ずる西参道が南北に走り、北の甲州街道との交差点の先には、今は都庁や新宿公園になっているが、当時は淀橋浄水場とガスタンクがあった。

淀橋浄水場近くの十二社は熊野神社や滝・池で江戸名所となっている土地で、当時はまだお茶屋・料亭も多くあり、夏には池で花火大会が開かれていた。今では新都心造成と道路拡張工事で池は埋め立てられ訓の神社だけは昔の儘である。

南には小田急線参宮橋駅と明治神宮、神宮内苑、乗馬クラブがあり、っ散歩には事欠かなかった。お陰で明治神宮内苑は本殿、宝物殿、広場などへ行く道は隅々まで熟知しており、良い遊び場でもあった。

中学生時代は友達と林の中に入って遊んだり、木に登ったりしていると見まわりの守衛さんに注意されたものである。

西参道は13間幅の道路であり、１０m間隔にコンクリートの継ぎ目があり、正確に１００m の距離が図れ、運動会前の早朝には１００m ダッシュのトレーニングをしたものである。今のように車が走っていない時代だからできたことである。
そして西参道に面した山内邸跡の塀は数百メートルにわたる10数センチの部厚い漆喰塀が続き、よく時代劇の撮影舞台になった。首都高速道路建設で壊されてしまったが今考えると惜しい文化財と言える遺構である。
西参道から原宿・渋谷に通ずる現在の代々木公園は、戦前は代々木練兵場であり、春一番には砂埃が立ち近所に迷惑をかけていたが、戦後は米進駐軍の住宅地となり、ワシントンハイツと呼称し、日本人立入禁止地域だった。
緑の芝生に雄大な敷地に建つ米軍 1 戸建て住宅を遠目に見て「あのようなところに住めたらいいなあ」と思っていた。そして東京オリンピックで選手村となり、代々木公園に変貌していくのである。
山内邸跡地の中央に池のある庭園があり、庭園には清水が随所に涌き出て灯籠、石橋が残っており、立派な庭園だった。池の水は湧水なので冷たく澄んでおり、入ると「ジーン」ときた。私はこの池で初めて泳ぎを覚え１０m 泳げるようになった。今では庭園は埋め立てられ家が建っている。

3. 代々木中学校

代々木中学校には夏休みから編入する。
代々木中学校は京王線幡ヶ谷駅と小田急線代々木上原駅の中間にあり、私の家から山手通りを超え、京王線初台を経由して20分以上かかる。代々木中学校の生徒数は6クラス、1クラス50人くらいの多人数であり、多くの生徒は屋敷町の住宅街に住み、教育熱心な父兄が多く生徒の質もよい。服装も学生服を着ていて、男女生徒とも自然体で仲の良い明るい雰囲気の学校だった。因みに私はジャンパーであった。
また、ブラスバンドが有名で、ブラスバンド部は東田中学校にはないクラブ活動でアリ、ソコカラ駒場高校の芸術学部に進学する生徒もいた。陸上自衛隊の北部方面隊の音楽隊長やっていた桜井君はこのケースである。クラスでは子供の人気　ドラマ「鐘のなる丘」に出演していた横山君、また、7年後輩には女優吉永小百合さんも通学している。
生徒の髪も東田中学にはなかった「坊ちゃん刈」の生徒もいて、区立中学としては品格のある中学校であった。因みに私は坊主頭であった。
その他、クラブ活動では水泳や男子及び女子のバレーボールが渋谷区の中では強かった。

4　水泳

東田中学にはプールがなかったが代々木中学にはあり、水泳のクラス対抗もあり、水泳が盛んであった。転校に伴う職員室での面接で担任の佐藤先生から開口一番「泳げますか」ときかれた。「泳げません」で全て終わった。私は学級の水泳戦力にはならな

いということである。
私は小学校時代から母に民間のプールの水は汚いからと言われ、杉並の白山プールに行くことを禁止されていたので水泳経験がなく、「金鎚」である。やっと代々木に引っ越し、山内邸の池で10m泳げるようになったばかりである。
水泳の盛んな中学校で泳げないし、勉強も持参した一学期の通信簿から見ても多くは期待できないと佐藤先生は見ていたのであろう。
佐藤先生から夏休みは学校のプールは使って良いといわれ、まだ、クラスに紹介されておらず友達もいなかったけれども池で覚えた水泳を基礎に毎日のように学校に行って水泳の練習をした。
日々上達していくのがわかり、水泳が面白くて仕方がなかった。「好きこそものの上手なれ」とはよく言ったものである。
先ず、背の立つところから泳ぎ始め、プール横幅の片道、往復と練習を重ねて距離を伸ばしてやがて縦の二5mに挑戦、最初は溺れないようにプールサイドの溝をつかめるようにプール端のコースで泳ぎ、やっと25m泳げるようになった。嬉しかった。でも息つぎはあまり上手にできない。
そして少しできるようになるとクラス対抗に出てくる上手に速く泳げる生徒は神様のように見えた。同じクラスの伯耆君などは50mを29秒台で泳いでいて、東京都の大会でも優秀な成績をおさめていた。大体、速い人はフォームがきれいである。
3年生の時に一緒のクラスになった井関淳子さんも成績が井野で有名だったが、その頃から背泳でも頭角を現し万能の同級生のスターであった。私には彼女は他所のクラスだったけれど神様に見えた。
2年・3年の夏休みもせっせとプールに通い自己流だけれども泳力を身につけ中学校ではクラス対抗の水泳競技会に選ばれることはなかったが、上達した。その結果、高校や防衛大学校では入学しても校内水泳競技会の選手にもなり、遠泳で引けを取ることはないようになったのもこの時期の水泳に対する一途の思い入れがあったかだと思う。
何かに自信を持つということは大切なことである。

5．授業

佐藤先生は2学期の初日にクラスで転校生の私と鈴木君を紹介した。
紹介は鈴木君を中心に紹介され、鈴木君は優秀だから皆も勉強を頑張るようにということであった。確かに鈴木君は理科系が得意で頑張っていた。
一方、私の紹介は名前だけだった。席も鈴木君と一緒に一番後ろの席に座らされ、私は、完全に「その他大勢」のデビューであった。アピールするものがない生徒はそんなものである。
佐藤先生は2学期に「好きな人と席を同じにしてあげるから名前を書きなさい」という指示を生徒に出した。一瞬、可愛いと思った女生徒名を「書こうかな」と思ったが転校生で厚かましいと思い「誰でもよい」と書いたら、結局、再び一番後ろで鈴木君

と同席だった。笑える話だ。逆に考えれば、誰も私と席を並ぼうとする女性はいなかったことになる。やはり書かなくて恥をかかずに済み良かった。シャイな山ノ手気質が出てよかったのである。
また、佐藤先生は３学期にクラスの９番までの成績を発表したが、私は入らなかった。里香の永井先生はいくら試験成績が良くても授業中発言しないものは通信簿に反映させていないとテスト結果を評した。
「中途編入者が目立つことなんて難しいのだ」と心の中で自問自答した。佐藤先生は個人的に話したこともなく、転校生のハンディは意外とあるものであることもよくわかってきた。短期決戦は難しい。
授業中の勉強はパッとしたものがなく、試験の成果もでないので、クラブ活動の野球部で頑張ろうと入部したが、部長のＡ先生の「チンピラ｝みたいな指導態度や運動部にありがちな部の雰囲気に馴染めず、１年生の冬に風邪をひいたのを機会に退部した。好きな野球も頓挫したし、精製も自分としては不本意である。幸いに編入や退部に伴う「いじめ」は全くなかった。
２年生になったら授業で習たことは授業中に理解し、もう少し積極的に手を挙げて頑張ろうと思った。少し向学心が出てきたのかもしれない。
２年生の担任は数学担当の女性の幅野先生で、津田塾大出の先生であった。津田塾大というと英語が得意と思われるが、数学科もあり、よく誤解されるとおっしゃっていた。幅野先生は数学を通じてそれなりに私を評価してくれた。
英語は得意科目だったので、少し自習するようになり、赤尾好夫の参考書で文法や慣用句を勉強し、授業で習うこと以外のことを多少知っていたので授業で新しいことを学ぶこともなく、「make of」と「make from 」の違いなどを説明させられるなど英語担当の斎藤先生も評価してくれた。
学校にも慣れ、授業中は英語、数学、国語とも積極的に手を挙げるようになったので、試験結果と相まって各教科の先生が次第に評価してくれるようになってきた。
代々木中学ではワシントンハイツに住む米夫人が月１回英会話に来てくれ、クラスの選抜者が受講でき、初めてネイテブの英語を生で聞くことが出来、外国人と話をすることに怖れは感じなかった。
私は、自宅では通関と期末試験以外勉強せず、同級生仲間と遊んでいた。その代わり試験の時は暗記すべきものは暗記し、夜遅くまで徹底して勉強した。だから試験はできても一夜漬けだから身についていないのかもしれない。
ある日、皆の前で幅野先生に「井田君は１日にどのくらい勉強するの」と尋ねられ「ひちつもしない」と答えるのも恥ずかしかったので「１０分」と答えたら当惑した顔をしていた。先生は皆に「勉強をしましょう」と言いたかったので、気の利いた答えではなかった。そこまで読めない馬鹿正直な生徒だった。今でいえば「KY」である。

6　高校受験

３年生になると高校進学が頭に入ってくる。私の属している第２学区は新宿、渋谷、世田谷、目黒の各区で構成され、男子の有名校は戸山高校と新宿高校が双璧で次いで千歳高校であった。当時、東大の進学率は第１学区の日比谷高校が１００名くらいで、戸山高校・新宿高校が夫々６０～７０名、西高校がそれに次いでいた。

幅野先生は、安全第１に考え、千歳高校を勧めたが、勉強していないくせに私は都心にあり、府立四中として伝統があり、かつ、繁華街からも離れ、環状線の中で一番広い校庭のあるという環境の良い戸山高校の受験に固執した。最初から負け犬になるのは嫌だったのである。不合格なら自分の能力がないのだから納得するけれど最初から挑戦せず放棄するのは好まなかった。

当時の試験は、内申書をも重視していたので、幅野先生は内申書を良くしてくれたかも知れない。

私はレベルの高い高校に合格するためにはアチーブメントテストの英・数・国の主科目では差がつかないと判断し、音楽・図工などの副科目を重視した。この作戦は図に当たり、アチーブメントテストの最後の音楽の問題で苦手の音符によるメロディを見て曲を解答する問題が出題されｔが「サンタルチア」と分かった時はこれで合格したと思い嬉しかった。案の定、合格し幅野先生がとても喜んでくれた。先生は本心はどうも心配だったらしい。

幅野先生には毎年お年賀状を差し上げていたが、ある年から突然返事がなくなり、弟さんに電話で尋ねたら行方不明で、あまり触れられたくない様子だったのでそれっきりになってしまっている。二年生、三年生と担任になってくれたので私を十分理解してくれ、よく面倒を見ていただいた先生だった。この感謝の思いは残念ながら先生には伝わっていないだろう。

三年生で同じクラスで藤崎君（東大）は戸山高校へ、川井君は新宿高校へ、菊池君は安全策で千歳高校へ進学した。他のクラスから戸山高校へ進学したのは高橋棟作君(東工大)、沼田君（けいおうだい)、鈴木君(慶応大)、森君(慶応大)、若林君(早稲田大)、小野桂子さん(お茶の水大)である。小野さんは生命科学者として生・死を体験から見つめた「いのちの日記」などを執筆している。高橋君は高校同期の HP 作成を暗闘しており、都内散策の仲間である。優秀で大学に進学する女生徒は旧代高女の女子系の駒場高校、優秀で卒業後、就職する生徒は第一商業高校または桜水商業高校へ行った。当時、女性は高校卒業後、会社勤務ー結婚ー専業主婦のコースが普通で、大学進学はあまり一般的ではなかった。

7　異性への関心

中学２年生くらいになると異性への関心が出る年齢である。その点、私はオクテだったかもしれない。

２年生になった時クラス替えがあったにもかかわらず２年生の１学期が終わった頃で再びクラス替えがあった。
１年生のとき最後部の座席だったので先生の授業が良く聴こえるように一番前の席を希望した。
後の席に八木さんという１年Ｂ組でも成績が良いという評判の女性が座っており。隣席の住吉君と休み時間によく後ろを向いて話をしていた。彼女とは正直言って女性という意識は全くなく男性友達と同じように話していたが、クラスの男性徒は仲が良い私達をひやかしだした。それか　　ら彼女にも迷惑と思い、話をあまりしないようにしているうちに、理由はわからないが、２年生の１学期でクラス替えになり、。疎遠になってしまった。彼女は駒場高校へ進学したが、卒業後はクラスも異なるので会うことはなく、進路も知らない。
２年生の２学期になると女生徒に女性としての意識がしっかりと芽生えてきた。
クラスに保科久美子さんという女生徒がいた。彼女は勉強もできてバレーボールが上手で学校代表のハーフセンターを守っていた。放課後、校庭で白の鉢巻きをして練習しているのを教室からよく見ていた。スリムで色は黒いが歯が白く、運動神経の良さに魅力を感じ、かつ好感がもて好きで憧れた。しかし、妙に意識して教室では残念ながら、
四列近く席も離れていて会話を交わしたこともなく、ただ、運動をしているのを見ているだけだった。彼女の自宅は学校の近くで。同級生の浅野君という家と同じ家の門に表札が買っていた。「浅野君だったらいいのに」と単純に思い、羨ましかった。
でも、学校に来れば彼女の姿を見ることが出来るので十分だった。学校行事があり、一度だけ２人で一緒に帰ったことがあるが、これが最初で最後のチャンスなのにドキドキして何も喋れないうちに８分ほどの学校近くの彼女の家まできてしまった。もっと遠ければいいのにと心の中で思っていた。残念ながら３年生で彼女はＢ組、私はＥ組とクラスが分かれ、校舎の区画も違うので休憩時間にすれ違うこともなく、時折、昼休みに遠目に見るだけであった。彼女は桜水商業に進学したが、その後の消息は知らない。
多分、彼女の全部が素晴らしく見え、彼女と話が出来たら素敵なのにと思いめぐらす完全な片想いいの初恋であったのだろう。何もメッセージを発することが出来なかったのだから仕方がない。
３年生の時、私の席の近くに座っていたのは南谷明香さんである。しかし、３年生になると受験の方に頭が向いているので女性どころでない。
彼女は南新宿周辺の代々木３丁目に住み、私の家の近傍で絵の勉強をしていて、駒場高校の芸術科に進学した。しっかり絵画の道を歩む女性だった。席は斜め後ろだったのに中学校在学中は殆ど同じクラスでも話をしたことがないのに、高校１年の通学で小田急線の南新宿付近の踏切付近で会うので、代々木駅までいつも一緒に話しながら

通学した。お兄さんが戸山高校の２年先輩だったこともあり、気軽に話せたのかもしれない。
とても清楚な「スッー」としたきれいな人だったが、私が小田急線でで通学するようになってからは会うことはなかった。
また３年生になって同じクラスにになった先に述べた神様である井関淳子さんは幡ヶ谷に住み、丸顔で親しみ愛嬌のある方で、本当に水泳のバックが校内で一番速く赤い水着で泳ぐ姿は実に素敵だった．その上、頭脳も明晰な女性だった。席は残念ながら遠く離れていた。
卒業学芸会で一緒に「花坂爺」を喜劇風に仕立て、私が花咲爺さん、彼女がお婆さん役で共演した思い出がある。
彼女は、都立第一商業に進学し、大手銀行に勤務し、長い髪をした彼女にクラス会であったのが最後で、私が防衛大学校４年生のとき既に結婚してしまった。庶民的な人懐っこい女性だった。その後の消息は知らない。
中学校時代は、自分の気持ちを伝えられない時代だった。南谷さんは芸術系、保科さん、井関さんは体育会系で対照的であった。
でも、私が好感度を抱く女性に共通しているのは、美少女でなくても成績も上位にいて頭の回転の速い、自分の考えを持った価値観を共有できる女子生徒のような気がする。
彼女たちも中学校の同窓・同期会画なので会う機会はなく、消息も知らない。どんな人生を送っているのだろうか？ふと思う。
自分が年齢を重ねると懐かしく、偶然どこかで会えたらと思うこともある。
夢を追う男性と現実に生きる女性との違いはこういったところにあると池波正太郎は言う。全く同感である。

8　修学旅行

修学旅行は昭和27年(1952)関西で、奈良。京都であった京都は「千切屋旅館」という宿に泊まった記憶と雨に降られてばかりの旅行だったような気がする。あまり覚えていない。しかし、私にとって鎌倉以西に出たのは生まれて初めてだし、知らない土地がみられる　ということで。少し興奮した。個々の見学より関西に来たという喜びが優先していたような気がする。
土塀の古びた趣の奈良の町屋を見たとき東京とは別世界だと思った。法隆寺、東大寺大仏、興福寺、猿沢の池、平安神宮、銀閣寺の定番コースにも行ったが、どれも歴史を感じ、特にお寺では広い構内にある法隆寺に関心があり、柱は教科書の通り真ん中が膨らんでいてシルクロードの影響を受けていることが分かった。仏像では奈良の大仏のほか、笑みをたたえた広隆寺の弥勒菩薩だけが印象に残っている。
後の人生で。関西に興味を持つようになった最初の旅行でもあった気がする。
修学旅行でよくある枕をぶつけあったとか話し合ったとか友達との交流の思いではな

い。関西の神社・仏閣を見るのに専念し、歴史ある静寂な東京にはない景色に酔いしれて夢心地でいるうちに何か疲れて早く寝てしまったような気がする。

9　おわりに

ここで、中学時代の３年間を振り返りと、１年生は転校生でもあり、水泳を覚えたことが最大の収穫であった。２年生になると恋心が芽生え始め、片想いだけれどもクラスの中でも好意を持つ女性ができ、心の中でも葛藤しながらも、やがて高校受験を控え、次第に勉強にも身が入るようになった。

この私を２年生・３年生の担任として支えてくれた幅野先生に感謝したい。

その後の人生において、私自身転勤が多く、中学校時代の友人達と全く縁が切れてしまっているのは誠に残念である。たとえ高校進学先は分かっていても高校卒業名簿は非開示であり、個人情報保護の観点でフォローするのは難しい時代になってしまった。なんと味気のない世の中になってしまったのだろう。

また、代々木地区はマンション住宅開発や小住宅への分割化が進み，旧住所に住んでいる者も少ないので住所を訪ねてもそこに住んでいる人は少ない。

中学時代の思春期の思い出は消え行くのみである。それが中学時代なのかもしれない。